

【全体】

Q：2023 年の見通しを事業セグメントごとに解説してほしい。

A：来年の見通しは現時点では細かく説明できる状況にはない。経済情勢が不安定で先行きが見通しづらいこともあり、詳細は来年 2 月のタイミングまで待っていただきたい。先ほどの説明の通り、自動車用ガラスは、ボトムを抜けて数量が戻ってきており、収益性は改善してくると思う。ディスプレイは足もとがボトムで、時期は読みづらいが調整が終われば、需要はあるので、業績は戻ってくるだろう。これらはかなりの確度で申しあげられる。戦略事業は来年も順調に拡大する。その他の事業は、経済の影響を受けるので見通しが難しい状況。

Q：半導体需要減速の影響が懸念される EUV をはじめとする半導体関連製品、大幅な調整があった塩ビ市況の今後の見方を教えてほしい。

A：半導体は、業界全体が減速しているが、ハイエンドのものはそれほど影響を受けていないと認識している。EUV マスクブランクスは客先の在庫調整の影響を受けているが、CMP スラリーその他の製品は順調であり心配していない。EUV マスクブランクスも今は調整局面だが、需要は旺盛なので来年以降は大幅に増えると考えている。塩ビは想定以上の下落があった。中国ロックダウンの影響がここまで長引くとは思わなかった。ただ、これが続くとも思っていない。世界経済がどれくらい堅調に推移するか、中国経済の戻り方、経済成長の度合いが心配ではある。また、従来から説明しているように経済が弱くなるとインフラ投資で経済を支える動きが出るので、東南アジアの塩ビの需要が大きく落ちるとの心配はしていない。塩ビは量よりも、価格がどう動くのかが注目点だが、今後を見通すのは難しい。今以上に悪くなることは心配していないが、どれくらい戻るかは現時点では読みづらい。

Q：なぜ短期で業績予想を修正したのか。

A：もともとの年初の決算発表段階では、営業利益を 2,100 億円としていた。これは上期 950、下期 1,150 と考えていた。2Q 決算発表時は、上期に上振れして 1,150 で利益が出たが、下期は変えずに 1,150 と考え、2,300 億円とした。当時は下期を大きく下げる要素が見当たらなかったため据え置いた。結果的には、下期が想定よりかなり悪かったという状況。

Q：景況感が急激に悪化しているが、今後の設備投資計画を再検討する必要性などはどのように考えているか。

A：設備投資を多めにしているのは戦略事業、成長事業であり、景況感関係なく伸びる事業であるため再検討する必要はないと思っている。それ以外のコア事業については、投資計画を精査したうえで既に絞り込んでるので、再検討する必要はないと考えている。

Q：現預金の水準が高い一方で、設備投資額が減少している。余剰資金があるのであれば、自社株買いをすべきではないか。

A：設備投資は、大型 PJ の進行がやや遅れている面があり今年の方は減少しているが、やるべき設備投資はやっていく。余剰資金が積みあがって見えると思うが、資金を使う用途のある会社に資金が貯まっているので、設備投資が進めば減っていく。自社株買いは、還元方針に従い機動的に考えていく。

Q：業績予想下方修正により今期配当性向が 50%を超える予想になっているが、減配の可能性は。

A：配当性向は 40%を目安に安定的に、自社株買いは機動的にという還元方針。この程度であれば減配の可能性は考えていない。

Q：四半期純利益に対し、親会社の所有者に帰属する当期純利益が小さいがなぜか。

A：純利益は親会社株主帰属と非支配株主帰属に分かれる。足もと、東南アジアのクロールアルカリ事業が堅調であり、これらの会社は 100%出資ではなく、JV 出資で運営している。タイでは 7 割、インドネシアは 5 割強の出資比率であり、非支配株主に帰属する部分がある。一方、戦略事業はほとんどが 100%出資なので、戦略事業の割合が増えると、親会社株主帰属の利益の比率が増えてくると考えている。

Q：為替の動きや中国をはじめとした地政学の動向が設備投資・生産地に関する計画に影響を及ぼす可能性はあるか。また為替の動向によって海外の現金を日本に還流することはあるか。

A：地政学リスクは当然考えていく必要はある。短期的に設備投資や生産地の計画変更を考えているということはないが、中長期的には地政学リスクに対するリスクヘッジを考えていくことは必要だ。現預金は色々な拠点に所在しているのは確かだが、還流に伴う税務、資金使途の問題があり、そういうことを考えながら対処していく。今、為替の動きに合わせて日本に大きく還流するということを考えているわけではない。

【ガラスセグメント】

Q：ガラス事業で地域別の状況を教えてほしい。また、電気代上昇で LOW-E ガラスなど好採算品への引き合いは強まっているか。

A：（スライドに天気マークで表示しているように）ブラジルは絶好調が継続している。日本アジアは完全な晴れではないが、以前に比べかなり改善してきている。価格も上昇しており、あまり心配はない。資産効率という面では課題を残しつつも概ね合格点に近づいている。欧州では、ガス消費を減らすために建物の省エネ化が急務であり、窓を省エネタイプにするための需要が強く、また EU 全体で、リノベーションウェーブという追い風もあるが、一方で、ここにきて経済が若干不安定なので、需要が続くのか心配している。エネルギーサーチャージが加算され、ガラスの価格も高くなっている。加えて、ガラス以外の建材コストや建築コストもかなり高い。需要は強いがコストも上がっており継続性があるのかといった点を心配している。

Q：ガラスの 4Q 営業利益は QoQ で 30 億円程度の利益改善を想定されているが、建築用と自動車用は各々どのような見方か。

A：ほとんどが自動車用ガラス。数量の回復と価格改定の効果の発現が見込まれる。

Q：主要な投入コスト（エネルギーコスト）は今後どのように推移するか。

A：投入コストで影響が大きいのは、ガスと電気。欧州のガスについて、建築用ガラスにおいては、エネルギーサーチャージでかなりの部分を価格で吸収できているが、自動車用ガラスには同様の仕組みがないので苦しい。ガス価格は在庫が十分蓄積されて一時的に下がっているが、冬が終わるとまた在庫蓄積が必要となり、再び高止まりするのは間違いないと思う。電気についてもガスを使用した発電があるため高止まりすると思っている。エネルギー価格上昇の一部は建築用ガラスのエネルギーサーチャージで取り返す。電気代の上昇については自動車用ガラスの価格改定等によって取り返す、これらをセットでやっていくのが非常に重要と考えている。

Q：足もとでは天然ガス価格が落ちているので、建築用ガラスの原燃料コストは 4Q から改善方向に働かないか。

A：原燃料コストは落ちるが、欧州の建築用ガラス市場ではクリスマスシーズンに販売が落ちるので、収益改善に大きく結びつくと考えるのは難しい。

Q：今年から来年にかけての世界の自動車生産台数の見込みは。また、どのようなリスクが考えられるか。

A：自動車生産台数は、戻ると言われながら戻らない状況が続いてきた。当初は 23 年にはコロナ前の水準に戻るといわれていたが、今は 24 年までかかると言われている。アジア圏においては半導体不足の解消が進み最悪期は脱した。当社は、IHS

のデータを参考にしているが、これによれば2021年が7,720万台、2022年が8,160万台、2023年が8,590万台となっており、コロナ前は9,000万台近くあった。そういう推移を想定している。

Q：自動車用ガラスの値上げは、どれ程の幅が実現したのか。3Qは価格改定がありながらも市況価格の悪化で赤字継続だが、価格改定は今後どのように効果を見込んだらよいか。

A：既に幅広い地域で価格改定に取り組んでおり、下期の後半に進むにつれて改定幅が大きくなっていく。また、ガス価格が急騰したことによって、従来の価格改定レベルでは不十分であるため、追加の価格改定を実施中だ。それが年末にかけて効いてくるのでそれなりの効果がある。ただ、価格の改定効果が大きく出てくるのは来年になり、期間を今年に限ると自動車用ガラス事業全体の収益を改善するまでには至らない。

Q：ロシア事業の現状を教えてください。当面継続するのか。

A：今年情勢の変化が生じた後、すぐに新規投資を停止した。EU等の制裁措置との関係もあり、ロシア拠点がスタンドアローンで事業を運営している。人やキャッシュの出入りもできない状況。今後、状況に合わせて様々な可能性を継続検討し、適切に対応していきたい。

【電子セグメント】

Q：電子の4Q営業利益はQoQで概ね横這いとの見方だが、ディスプレイと電子部材は各々どのような見方か。

A：電子部材は下期型で引き続き好調。ディスプレイはお客様の稼働調整が続き厳しいとみている。

Q：ディスプレイガラスについて、競合他社がパネルメーカー稼働は9月に底を打った、とコメントしているが、AGCはどのように見ているか。

A：ガラスの需要に対する見方はあまり変わらない。ディスプレイガラスの全需はQoQで微増とみている。AGCの出荷という面では、客先稼働のタイミングの影響によりQoQで微減と見ており、マーケットとはやや動きが異なる。23年上期から在庫調整が一巡して徐々に出荷が回復し、23年下期から本格的に回復してくるというのが今の見方。

Q：EUVマスクブランクス対前年伸び率、9カ月累計と第3四半期のYoY、QoQを教えてください。

A：前回の決算説明の際に説明した通り、お客様の在庫調整の都合上、YoYでほぼ昨年並みにとどまっている。来年以降に回復し、かなり大幅な増量になるとみている。

【化学品セグメント】

Q：2Q説明会時に宮地CFOが塩ビの大幅な調整はみていないと言っていたが、夏以降、大幅に調整している。短期的な市況前提に対する考え方が甘いと認識しているが、この点についてどのように考えているか。

A：2Q決算発表までは高値が続いていて、発表直前では下落していたが、大きく落ちたので戻ると考えていた。その後、あまり大きく戻ることなく推移しているので、見方が甘かった面はあるかもしれない。2Q説明会時に、上期の市況は高すぎる水準であり調整は入ると説明した。ただ、そのときは急激には下がらずマイルドに下がると思っていたが、急落した。中国のロックダウンの影響等を読み切れなかった。

Q：化学品セグメントのサブセグメント営業利益割合をもとにライフサイエンスの営業利益率を計算すると3Qにかなり利益率が改善しているが、その理由は。また、この高い利益率の水準は維持できるのか。キャンセルフィーについて言及があったが、この影響についても教えてください。

A：毎四半期、利益割合をイメージとして表示しているが、10%刻みで表示しているため歪が出てくる。単純に割合をかけて計

算するとご指摘のような見え方になるのは承知しているが、実態は 1Q-3Q で大きな利益率の変動はない。キャンセルフィーについては、一部のお客様から稼働補償のような形でフィーをいただいている。

以 上